

# 泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/28175">http://hdl.handle.net/2297/28175</a>

#### d. 「卵塔場の天女」と尾山神社の能舞台

金沢の近江町市場が登場することで知られている「卵塔場の天女」(昭和 2)は、鏡花が作品発表の前年である大正 15 年 11 月、親交の深かった新派の女形・花柳章太郎の来沢に同行して帰郷し、生まれて間もなく他家に養女に出され疎遠となっていた妹やゑに再会した体験をもとに描かれた〈金沢もの〉であると同時に、鏡花を思わせる主人公・橘八郎が能楽師として登場することから〈能楽もの〉の一つにも数えられる作品である。八郎の母方の実家が〈葛原〉という名の能楽師の家であったこと、八郎の祖父・伯叔父揃って能楽師であったという設定は、明らかに葛野流の大鼓方として三代続いた中田家を意識したものであり、作品のクライマックスの舞台には中田家の菩提寺・全性寺を思わせる日蓮宗の寺が選ばれている。鏡花は郷里での妹やゑとの再会を機に、やゑの出産後に死去した母鈴と、母を通して自らに流れる能楽師一家の血筋に改めて思いを馳せたのであろう。

そんな鏡花自身を投影させた八郎が〈年一回の催能、当流第一人のお役者が本舞台からの乗込みである〉との触れ込みで立つ能舞台のある場所は、次のように記されている。

楽園と云うのだそうである。諸侯の別業(しもやしき)で、一器、六方石の、その光沢水晶にして、天然の簫の形をしたのがある。石灯籠ほどの台に据えて見事である。そのほか箏箏などは、いずれもあとから擬えたものであろうか、築山、池をかけて皆揃っている。(中略)表入口を、松原越の南の町並に受けて、小高く、ここに能楽堂がある。八郎は稚い時、よく出入をして知っているのも……(以下略)

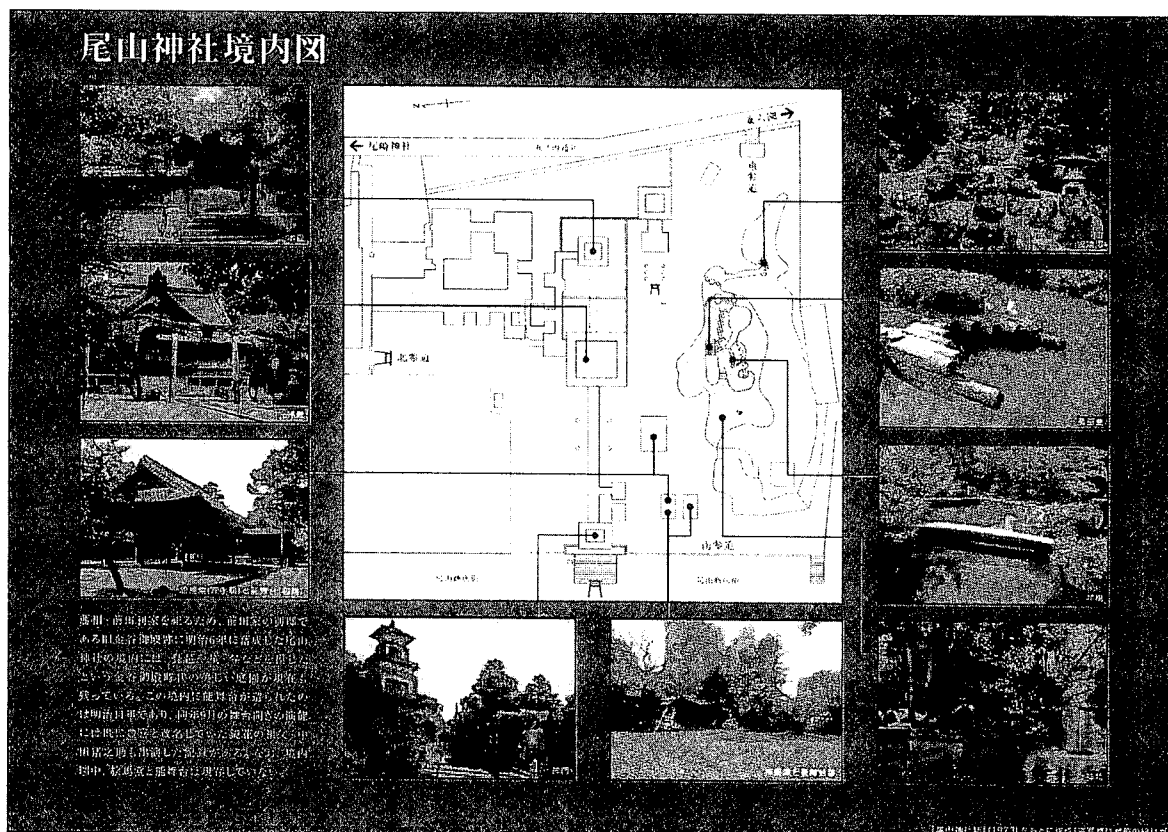
楽器を模した造作の庭のある〈諸侯の別業〉といえ、現在尾山神社として知られている旧金谷御殿跡の神苑が思い起こされる。金沢城の出丸で加賀藩主の別邸であった金谷御殿は、特に能に造詣が深かった前田齊泰によって慶応 3 年に大改修されており、楽器の庭と称賛される庭園も江戸末期から尾山神社の創建までの作庭といわれている。琵琶島・兜島・鳳笙島・琴橋・響遠瀑など雅楽を思わせる造作は、その後も幾度か改修されているため当時のままではないであろうが現在も苑内に残されている。

尾山神社は鏡花の生まれ年でもある明治 6 年の造営であり、明治 8 年にはシンボルである神門が落成、そして明治 11 年には境内に能舞台が造られ、舞台開きの演能には鏡花の祖父・中田豊喜(三代猪之助改名)も出演している。豊喜は江戸から帰藩した年である明治元年 11 月にも旧金谷御殿内の能舞台で催された前田家の演能に父子で出演した記録があるから、鏡花にとって尾山神社は金谷御殿時代からの祖父豊喜ゆかりの地ということになる。「卵塔場の天女」では八郎は幼い頃からこの舞台に出入りし、時には母にともなわれて祖父の出演する演能を見たとされているが、実際に鏡花の幼少期にそのような経験があった

としても不思議はないだろう。また、八郎が「羽衣」を舞う際、舞台上で使用する衣装については〈大諸侯の持物の御秘蔵と云うのが出るんですから、衣装には立派なのがあります。——第一天人の面は、私どもの方でも有名なのだし、玉の簪、鬢、女飾髻、鬢帯、摺箔縫箔、後で着けます長絹なんぞも、私が小児のうち、一度博物館で陳列した事がありますがね、今でも目に着いて居ます。全く三保の浦から松の枝ぐるみ霞に霞鬨いて来たやうでしたよ。……すぐわきの築山の池に、鶴が居たつけ〉とあり、前田家伝来の能装束であることがほのめかされている。実際にこれに該当する衣装があるかどうかは不明だが、尾山神社に能舞台が開かれるに際しては前田家から二百数十点の能衣装や小道具等が寄附されていることから、鏡花が尾山神社と能をめぐるこれらの事柄に関心を寄せ、記憶していたことが窺える。

なお、作中、鏡花の又従妹・目細てるをモデルとするお悦が舞台上で八郎の背を打つという場面は、観世流の家元・観世清廉が舞台上で女性に打たれたという実際の事件を反映したものと指摘されている。

(穴倉玉日)



尾山神社境内図（戦前を想定／鳳笙島・琴橋・神輿庫と能舞台跡は現在の様子。他は当時の絵はがきによる）